

# 伊平屋村における<sup>ユイ</sup>結

比 嘉 輝 幸

まえがき

## I 伊平屋村の概要

- 1 背景
- 2 産業構造
- 3 労働力需給

## II ユイの現状

- 1 ユイの変遷
- 2 生産組合の機構
- 3 生産組合の機能
- 4 生産組合の賃金

あとがき

## まえがき

日本の行政中枢地・東京から眺めると、沖縄県ははるか南の離島県である。国土地理院の調査によると、大小135の島々で構成される、という。この離島県のなかに、県の行政中枢地・那覇の北方にさらに離島村として伊平屋が位置する。この小論では、事情聴取して得た資料に基づき、伊平屋村におけるユイ（結）の現状について報告したい。

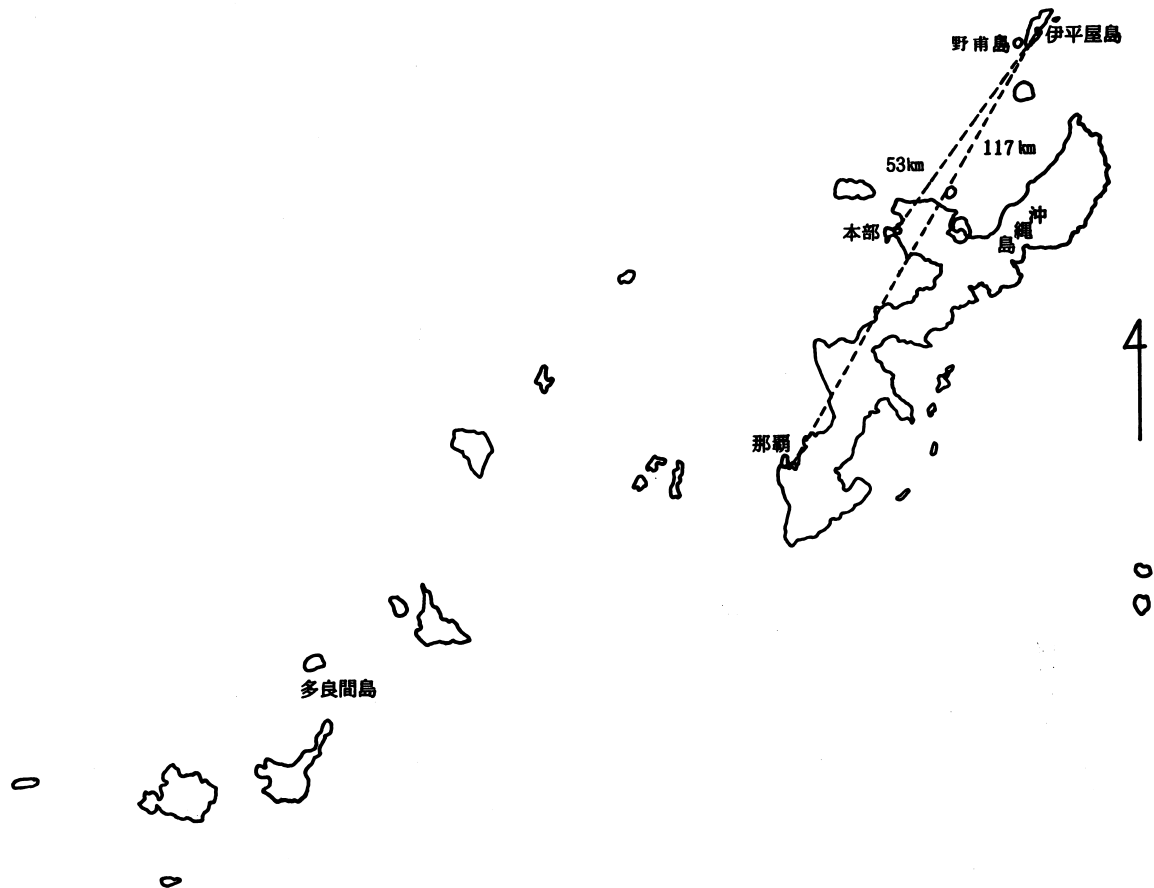
まず最初に、報告の対象となる伊平屋村を概観する。例えば、地理や人口動態などの背景を見わたす。あるいは、産業構造やユイのよってたつ農業の状態を、統計資料から調べる。それから、ユイの変遷とそれ以後の共同労働の形態や機能について、事情聴取の結果を紹介したい。いわゆる、伊平屋村の全体像を視野に入れながら、ユイの現状把握を試みたい、というのがこの報告の主旨である。

## I 伊平屋村の概要

### 1 背景

伊平屋村を概観するにつき、図1を参照したい。伊平屋村は伊平屋島と野甫島の2島から成

図1 伊平屋村の位置図



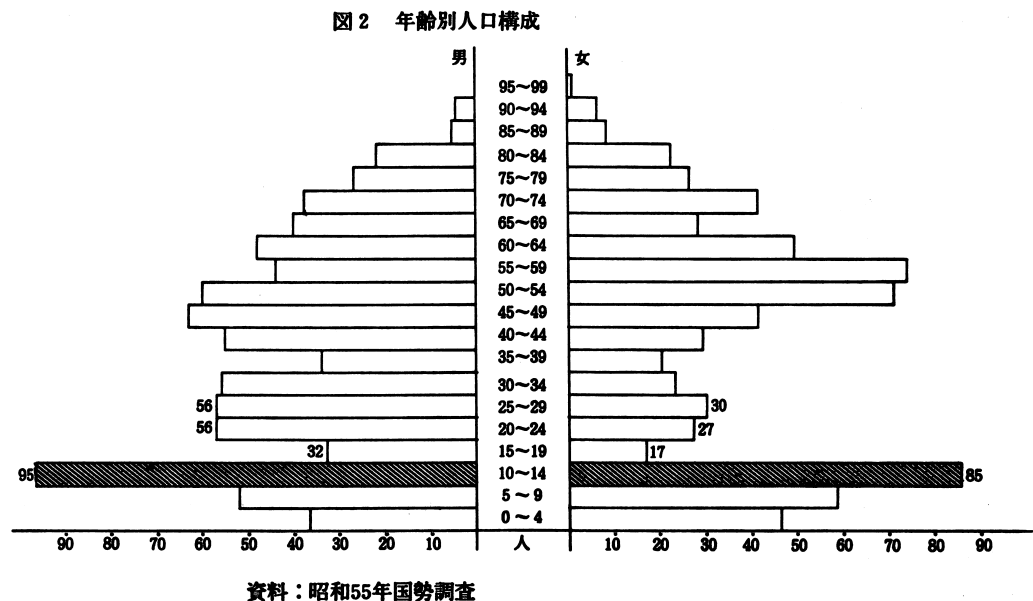
資料：伊平屋村役場『伊平屋村総合計画基本構想』、昭和52年、4ページ。

(1) り、沖縄県の最北端に所在する。にもかかわらず、意外なことには、島尻郡（沖縄本島の南部区域）に属している。このことは、陸上交通網のまだ発達してなかった昔時の名残りであろう。当時、経済中心地・那覇への往来には、現在のように本部まで海路を用い、そして陸上を那覇まで南下したのではなく、直接伊平屋から那覇に比較的発達していた海路のみを利用したものと思われる。そこでいきおい、経済上の要因で、行政上も、北部圏の国頭郡ではなく、南部圏の島尻郡の一部として区画されたのであろう。<sup>(2)</sup>

伊平屋村の面積は22.25km<sup>2</sup>（伊平屋島21.22 km<sup>2</sup>、野甫島1.03km<sup>2</sup>）。沖縄県下53市町村のうち多良間村（宮古郡）について27番目となり、沖縄県の総面積の1%弱にあたる。<sup>(3)</sup> 沖縄県は日本全国のはぼ0.5%の面積に相当するので、沖縄の人たちが全国に思いを馳せる感覚と、伊平屋村民が沖縄本島を眺望する思いには、一脈相通ずるものがあるのかもしれない。

村の人口総数は、昭和30年の4008人をピークに、その後は減少の一途をたどっている。昭和55年の国勢調査では、男801人、女700人、計1501人で、市町村順位も末尾に近い48番にしかならない。面積の市町村順位とは隔絶しており、沖縄県に占める人口比率も0.1%でしかない。当然、人口密度も67.5人/km<sup>2</sup>と低く、県全体の491.8人/km<sup>2</sup>とは比較するすべもない。

年齢別人口構成（図2）においては、10歳から14歳までの学齢期が男女ともに極めて多い。しかし、次の15歳から19歳までの年齢層で、激減する。この現象は、高校や大学などの高等教育を修得するには、島外移転を余儀なくされるためである。そして、学齢期を過ぎた年齢層



- (1) 地図からは判明しないが、伊平屋島・野甫島間に昭和54年6月、野甫大橋（全長600 m）が開通。  
 (2) ちなみに、伊平屋・本部間の距離は53kmで、伊平屋・那覇間は117km。  
 (3) 昭和55年国勢調査。

(20～24歳、25～29歳)になっても、いくらか人口増加をみるものの、もとのレベルまでは回復しえない。学業を終えても、島には帰れないか帰らない若い人たちが多くことを示唆する。村民の頭痛のタネである人口過疎と労働力不足の課題をうかがい知ることができ、野甫大橋に掲げられた古老の碑文が、島人の願望を如実に物語っていよう。

### のほおおはし (読人 末吉福吉)

世代のある間

栄る野甫島

真南向かって見れば

城前なち

島に生りやい

御恩忘りゆみ

たきほどになやい

御恩さびら

伊平屋は沖縄千余年の歴史上、興味をそそる島でもある。琉球の第一尚王統の始祖は尚思紹であることはつとに知られている。ところで、思紹の父・<sup>うよしゆ</sup>鮫川大主は伊平屋我喜屋部落の出身、との伝説がある。<sup>(4)</sup>それにまつわる片隈神社が丘の上に、屋蔵墓が海辺にまつられている。そのほかにも伊平屋は、ゆかりのある地といわれ、古色蒼然とした島なのである。

## 2 産業構造

伊平屋村の産業構造を、昭和55年の15歳以上就業者数822人から分類すると、第1次産業50%、第2次産業と第3次産業が各々25%となる。沖縄全県の産業構造はそれぞれ13%、21%、66%となっている。<sup>(5)</sup>沖縄全体としては、第3次産業のウエイトが高いことは周知の事実だが、伊平屋村では逆に第1次産業が半分を占めてしまう。第1次産業がこのように顕著なのは、離島の特徴であろう。

第1次産業のうち、農業従事者が90%強を数える。農業が村の基幹産業であり、そのなかでも製糖業が主要産業となっている。農家戸数は275戸で、そのうち専業38戸(構成比13.9%)、第1種兼業68戸(同24.7%)、第2種兼業が169戸(同61.4%)。<sup>(6)</sup>第2種の比率が高いのに注目したい。しかし、伊平屋は山岳が多く、耕地面積は村面積の2割弱の四百ヘクタール余である。従

(4) 井上秀雄『沖縄史概論』、昭和47年、112ページ。

(5) 昭和55年国勢調査。

(6) 第1種兼業は農業が主で、第2種兼業は農業以外が主。

って、1戸平均の経営面積は、県内全離島平均の6割規模の80アールにしかならない。はなはだ零細な農業といえよう。そこで現在、耕地の基盤整備のための構造改善事業が進行中であり、特に百ヘクタールあまりの広大な田名グムイ（沼）の農用地開発も考慮中である。他方、漁業・水産養殖業への従事者は、第1次産業労働者の10%弱と少ない<sup>(7)</sup>。島の周辺には好漁場が恵まれているにもかかわらず、奇異な感じをぬぐえない。昭和56年、伊平屋村漁協を伊是名から分離設立し、かつ漁船の大型化や漁港の建設などの努力がなされてはいる。

第2次産業では、建設業従事者が93%以上を占め、第3次産業ではサービス業、公務、卸売業、小売業などが目立つ<sup>(8)</sup>。

### 3 労働力需給

伊平屋村の総人口1501人のうち、生産年齢（満15歳以上）人口は1130人である。そのうち特に働く意思かつ働く能力を有する者の総数（労働力人口）が828人となっているので、労働力率（生産年齢人口に対して労働力人口の占める割合）が73%とすこぶる高い。ちなみに、全県の労働力率は60%でしかない。この高労働力率の要因として、二つほど想見できよう。まず第1に、村内には高校や大学などの高等教育機関が無いということ。必然的にこれら学齢期の人口が極端に少ない（前掲）。第2に、伊平屋村では女性の専業主婦人口が同じく女性の生産年齢人口の28%と少ないこと<sup>(9)</sup>。最近では、主婦の職場進出がしばしば一般話題にのぼる。それでもなお全県では、女子の生産年齢人口の39%が主婦専業として家庭にとどまっている。それからすると、伊平屋村の主婦には、農業やその他の分野で働く機会が多いということであろう。このように、学齢人口と主婦専業の少ないことが、村の高労働力率をもたらしているものと<sup>(10)</sup>完全に推測される。

村の人口過疎の現状を念頭におけば、完全失業率が低いだらうことは、容易に想像がつく。事実、県の失業率が7.7%のおり、村の完全失業者はわずかに6人で率にして0.7%であった。この低失業率には、基幹産業である農業の貢献が大であると思われる。農業が失業者へのバッファー（緩衝地帯）として働いていると推断できる。しかし、見方を変えると、いかに失業率が低いからとはいえ、労働市場への新参者に適職が入手可能かといえば、そうではなさそうだ。やむを得ない場合に、農業がバッファーとなって不十分ながら吸収することができる、ということであろう。このように解釈すると、擬装失業者が多数潜在する可能性があり、失業率の数字の内容吟味は無視することができない。

(7) 昭和55年国勢調査。

(8) 同上。

(9) 同上。

(10) 学齢人口の減少は生産年齢人口の減少へ、専業主婦の減少は労働力人口の増加へとつながる。いずれも労働力率の増大に作用する。

## II ユイの現状<sup>(11)</sup>

### 1 ユイの変遷

ユイ（結）とは、賃金の支払いをとまなわぬ労働力交換の組織、と定義できよう。ユイマールあるいはイーマールとも呼ばれる。

沖縄では、このユイという言葉は首里王府時代から使われていたもようである<sup>(12)</sup>。1家族の労働力だけでは間に合わないほど短期かつ大量に人手のいる田植えなどの場合、何軒かの農家が共同で田植えをする。この際、手伝ってもらった農家は、手伝いに来てくれた農家の田植えのときには手伝いに行って、手伝ってもらった労働量を同じように手助けして、労働をお返りする。いわゆる、ブートナミー（賦並）を行なうユイの形態である。

このようなユイの形態は、ことさら沖縄独特のものというわけではない。古くは遠くヨーロッパにも観察される<sup>(13)</sup>。6世紀の半ば頃、ヨーロッパの肥沃なしかし硬い土壌を掘り返すのに、車輪と刃が2枚ついた新しい交差型の鋤が発明された。この交差型鋤は非常に重いので、牛8頭の力で動かさなければならない。ところが、当時、1戸の農家だけで牛を8頭も所有する能力はなかったので、各戸が協力して牛を駆り出した。しかも、こうした新しい交差型鋤が開発された結果、それぞれの所有地に囲いを設けておくのは非効率となった。牛8頭で引くこの大型で重い鋤は、長くて広い畑地で最も効果を発揮したのである。そこで、ヨーロッパの封土のなかには、全農民参加の農耕形態が出現するようになった。そして、お互いに牛と労働力を出し合うという形で、共同耕作が行なわれるようになったのである。

伊平屋ではもともと、血縁や地縁で結ばれた数戸の農家同志で、ユイが構成されていたようである。地元の人々は、イーマールと呼びあるいは又簡便に隣組ともいう。伊平屋村には5部落（田名、前泊、我喜屋、島尻、野甫）があるが、ユイの意識は前泊部落において特に濃厚なように感じられる。他の4部落とは異なり、前泊は港のすぐ近くであることも手伝い、他地域からの移住民が数多い。主な移住先としては、隣り島の伊是名や那覇、糸満、本部そして恩納などがあげられる。そのせいで、同じ境遇にある者の相互扶助の精神やあるいは他部落への対抗意識からか、縁故関係や隣同志で、ユイに強く依存しているのである。

ところが、これら初期のユイ組織には、機能の面で問題が伏在した。伊平屋の製糖工場は含蜜糖（黒糖）を製造する。この場合、まず甘蔗の梢頭部（上部）を切り落としそれから収穫する刈り入れ様式の作業テンポでは、黒糖製品の質の低下を来し、さらに原料（キビ）から製

(11) 第II章は、1983年2月21日～26日と同年8月16日～19日の2度にわたる事情聴取が主な基礎資料となっている。調査では、名嘉利光氏（村役場経済課長）、新垣文義氏（農協総務課長）、伊礼亀吉氏（農漁兼業）、金城長政氏（農業）、前田敬一氏（農業）に多大なお世話になった。記して謝意を表したい。

(12) 安良城盛昭『新・沖縄史論』、沖縄タイムス社、1980年、88ページ。

(13) ジェレミー・リフキン、竹内均訳『エントロピーの法則』、祥伝社、昭和57年、98ページ。

品への歩留まりも悪くなる。そこで、短期集中的な刈り入れが必要不可欠となる。元来、数戸だけの小人数のユイがこの要件を満たすには多少無理がある。特に緊急の際、例えばユイ仲間に病人がでて働き手に欠員が生じた時には、たちまち農作業に支障を招き、ユイの限界が露呈する。このことは、ユイ自体が常に不安定な状態にあり、特に不慮の際の労働力の代替という難題を抱えている証左である。労働力の代替については、雇い手は手の空いた雇われ手を、そしてその逆の場合も個人ペースで交渉は行なわれていたので、時には村中が混乱状態に陥いる場合もままあったようである。このようなユイの欠陥は、耕作規模が拡大するにつれ、深刻の度を増していったようである。

問題を解決するため、小組織のユイは大組織の「さとうきび生産組合」へと発展解消していく。しかし、生産組合誕生の背後には、労働力確保要因とともに、さらに行政的要因も見落とせない。甘蔗搬出機やトラクターなどの機械化に起因する農業事業の主体は、これまでは、村当局で間に合っていた。ところが、規定改正に伴い、村以外の事業主体が要求されたのである。そこで、農業事業主体として、ユイを核にした生産組合の登場となったのである。この場合、事業費用の分担金の問題が生じる。具体的には、事業費用の70%を国と県で、15%を村が補助する。残りの15%は生産組合員あるいは事業農家の分担となる。それには、数戸の農家だけのユイよりは、規模を拡大した生産組合の方が、個々の農家にとって分担金が軽減され有利なのは明白である。同時に、ユイの機能の面からも、規模の大きいのが歓迎され、ここに「さとうきび生産組合」が結成されるのである。地元では、「さとうきび刈り取り班」あるいは単に「搬入組合」とも称する。

5部落のうち、ユイから生産組合への移行が最も早かったのが前泊区で、10年以上も前にさかのぼる。田名区などは7年位前からとのことである。ついでながら、現在では、「しいたけ生産組合」や「うし組合」なども結成された。

## 2 生産組合の機構

生産組合は、村全体で12組合結成されている。内訳は、我喜屋区が最も多く1から4までの4組、田名区には東・中・西の3組、前泊区と島尻区が各々東と西の2組、そして野甫区に1組となっている。各組の構成人数は一定ではなく、大体25～30人の範囲である。製糖工場を所有している農協は、組合の規模に応じて1回分の甘蔗搬入量（10～20t）を割り当てる。しかし、もしも何らかの事由で搬入に支障が予期される場合は、組合の責任者は他の割り当てのない組合に応援を依頼して、急場をしのぐらしい。今では、組織だった労働力の調達が計られている。

生産組合は、小組と呼ばれる下部組織で再構成される。すなわち、各生産組合はそれぞれ6組前後の小组に組み分けされており、各小组の人数はほぼ5人。このメンバーは血縁や地縁である。要するに、生産組合の末端組織には、以前のユイの形態がまだ残存している、ということになる。

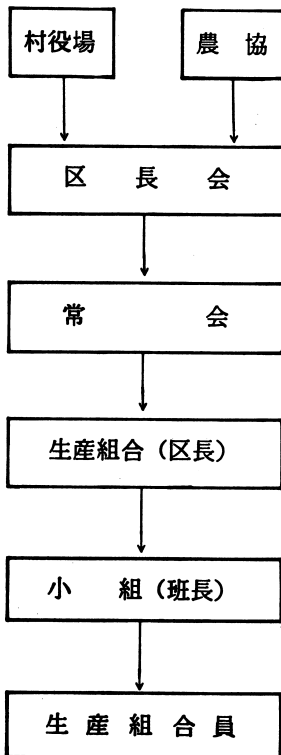
生産組合は老若男女からなるが、大多数が老人や主婦が占める。壮年の働き手が少ないのが難題で、せいぜい全体の2%位にしかない。老人が罹病したり、若者が就職したり、あるいは個人的な理由により、組合の人員構成は流動的となる。そこで、毎年、人数や性や年齢のバランスを保つべく、組合を再編し調整が行なわれる。

生産組合内の仕事は適性に分担されている。例えば、若者は力の要る運搬や詰め込み作業を、老人や婦人は力はさほど要らないがどちらかといえば技術を要する梢頭部の切り落としや刈り倒しを担う。

### 3 生産組合の機能

生産組合は、ユイと比べて格段に組織化され機能している。組織の位置づけ(図3)として、トップには村役場や農協の指導をおおぎながら村内の全生産組合の調和や連結を計る区長会が存在する。その下に、各区をまとめる常会がある。そして、常会の意向を受けた生産組合が位置づけられる。この個々の生産組合の責任者あるいは組合長は、通常には区長が代行する。さらに、この生産組合を、班長に統轄された小組が支える。そして、究極的には小組の各組員が

図3 生産組合の階層構図



基本的な組織構成員となる。このような階層制度の下、生産組合の機能の円滑化が図られている。

生産組合には当然種々の規定が設けられている。その一つが、労働時間に関するものである。組合により多少のずれは覗けるが、ほぼ8時から5時までの就業時間と定められており、組合員は各自弁当持参で畑に出勤する。昼食時間以外に、午前と午後それぞれ1回ずつ休息時間も設定されている。そして、小組の班長が、各組全員の出勤状態を責任をもって日誌に記録する。現在の生産組合のこの機能は、昔日のユイとは随分趣を異にする。ユイの頃は、各自は自己裁量で適時に出勤し、そして頃合をみて作業を終了した。しかも、昼食は搬入地主が準備し、しかも仕事を終えた後は地主の家でくつろぐ、という状況であった。それを思い浮かべると、今日の生産組合は、見事なまでの合理化かつ機構化ではある。

生産組合は、製糖工場の操業開始時季に合わせて、例年12月頃に結成される。そして、翌年の3月頃の搬入完了まで、組織としての重要な役割を果たす。しかしながら、搬入終了の3月から4月にかけては、田植えやキビ植えのシーズンなので、生産組合が引き続き



活用される。その後、生産組合の最終的機能として、5月5日（子供の日）の行事が挙げられる。この日は、組合毎に行事のプランが練られ、ともに祝う。男は海で漁獲し行事の食糧として供し、子供たちには賞品が配られ、あわせて組合員相互の親睦がはかれる。この行事が済めば、生産組合は実質的な役目は全て終えたことになり、後は組合員の労働提供に対する金銭的な清算と慰労を兼ねたスービーユューエー（終祝）を催すのみである。金銭の授受は一括支払以外は原則として認められてないので、スービーユューエーの場で日誌を基準に、これまでの労働出役の収支決算がなされる。そして、12月の組合再編成までは、各自行動を別にする。組合解散後の農閑期には、それぞれが個々の田畑の管理や漁業や公共工事などで働く、という柔軟性が散見される。

#### 4 生産組合の賃金

出役組員の賃金は、村全体の連絡機関である区長会で、最初に話し合われる。しかし、区長会で合意を得た賃金水準は、あくまでも、目安としかならない。この合意賃金を参考にしながら、各区は常会で、区の情勢に合うように、あるいは組合員の意向を反映すべく討議される。そのため、出役賃金は、村全体としては共通でないが、区内の複数の生産組合にとっては同一となる。一般的には、1982年～83年製糖期において、男子の日給は4千円となっている。この額は区長会で決定された水準と一致した。区長会の合意賃金が常会でも受け入れられた、ということがわかる。

男の4千円の一般賃金水準を、どう評価できるであろう。同じ時点で、もしも土木工事に臨時採用されれば、日給5千円が相場らしい。そこで壮年者の中には、土木工事を指向する人たちも見られる。しかし、主婦や兼業農家からは、臨時収入の類似として喜ばれているらしい。いわゆる、パートタイムのような考え方である。この意味合いでは、生産組合は雇用機会の創出効果を有する。「パートバンク」と見なされよう。他方、経営農家の立場からは、土木工事に従事する人を雇うと5千円の出費になるところ、4千円で済ませられるので大助かりだ、との意見も耳にする。いずれにしろ、この賃金水準は大方好意的に受け入れられている。ちなみに、隣村の伊是名でも、男の甘蔗収穫労働の日給は4千円であった。

年齢による賃金格差は、どの集落どの生産組合にも見当たらない。老いも若きも一率だという。その理由は「自分もどうせいずれは老いるのであり、あえて格差をつける必要はなからう」との、長期的展望に立脚したかつ鷹揚な処置である。

しかし、男女間賃金格差に関しては、様相は一変する。これについては、各集落毎に扱い方が違う。例えば前泊区の場合、際立つ団結心と相互扶助の精神からか、男女差は一切ない。あるいはまた、「男は男なりに女は女としての適切な作業分担が可能なので、男女間格差は説得力を持たない」との主張も聞かれる。他方、別の集落、例えば田名などでは、僅かながら格差を設定している。ここでは男4千円に対し、女は3千八百円である。「このような差を設けないと、生産組合に男子の組員が集まりにくい」とのことである。

スーパーユーエーにおける総合収支決算では、各組合員が甘蔗出荷量の割合に応じて出資し、そして出勤日数に応じて賃金の支払いを受ける。一般には、出勤日数が多ければ多いほど有利だとする考えをもっていることから、さとうきびの値段は相対的に賃金よりも低い、と理解することができるかもしれない。

搬入終了後の3月から4月にかけての田植えやキビ植えの労働出役は、完全にお互いが無料奉仕となっている。ユイ本来の姿が、ここではかすかながらもまだ残っている、といえよう。

## あとがき

本来の内容のユイは、年々衰退してきている、とよくいわれる。確かに、ここ伊平屋村においても、初期の縁故や隣組形式のユイから、今では行政的な生産組合が基盤となって、甘蔗の収穫作業をさばくようになった。もはや、生産組合には労働力の交換を相互に行なう共同労働としての色彩は甚だ薄い。しかし、ユイに代わる生産組合は、伊平屋社会に堅実に制度化され、かつ首尾よく機能しているように思われる。人口構造のアンバランス、人口過疎、そして労働力不足などの難問をある程度まで解消しているものと思慮される。この好結果には、行政的な必要性とともに、伊平屋村の甘蔗が含蜜糖の製造に供されるという特性が寄与していることも見逃せないだろう。

ひるがえって、沖縄本島の甘蔗は分蜜糖製糖工場に供給される。そこでは、搬入をことさら急ぐ必要はない。にもかかわらず、人手不足の悩みはまだまだ深刻である。伊平屋村の生産組合の実績が、貴重な手本となるのではなからうか。

偶然にも、生産組合による甘蔗収穫作業の現場を実見する機会を得た。本島での小人数による収穫風景を見慣れている者には、30人ほどからなる集団労働は目が醒めるほどの壮観である。しかも、各人が楽しそうに仕事をしていた様子が印象深い。ボードリヤールの「人間の連合の実現によって、労働が同時に楽しみになる<sup>64</sup>」という深い洞察がやけに想起される。労働している生産組合員の表情からは、とてもシマチャビ（離島苦）の様子は見出し難い。シマチャビとは誰にとって、どのような問題を指しているのだろうか。シマチャビの問題よりもむしろ、都会に住む人たちの「都会苦」の方がより重大な難問ではなからうか。都会でよく見掛けるストレスを解消すべくジョギングやスポーツセンターなどは、この清澄かつ平穏な伊平屋島にはどこにも見当たらない。

（昭和59年1月29日脱稿）

---

(14) 清水正徳『働くことの意味』、岩波書店、1982年、175 ページ。